

# 新しい農業者が育っている □西 正勝

## ★農業構造改善の旗手たち

### 流出の中の豊かな芽生え

これまで熊本県でも、区画整理・農道新設などの基盤整備事業や、集乳施設、共同選果場などの近代化施設導入などの構造改善事業が多くの市町村で行なわれてきた。しかし、これら整備された土地基盤や近代化施設を活用する肝心の人間、あるいはまた、真の構造改善がまだ行なわれていない数多くの地域や農家の今後の構造改善をすすめる農業者たちはどうであろうか。

従来、農業者の人間性については「もの言わぬ農民」「隣近所相手の農民」と言われてきたし、就業構造については、特にここ数年「若者の流出」「農村の嫁不足」「老令化、婦女子化」など盛んに憂えられてきた。

しかし、私は近年、農業に生きる新しいタイプのたくましい若者たちに会い「次代の新しい息吹きが拡がっている」という希望と、彼らによる「豊かな農業

・農村」への期待とを抱いている。そして、彼らこそが農家と農村を真に近代的な構造に改善し、自から運営して行く新しい農業生産力への担い手であると信じている。自力で経営を改善し、豊かな生活を建設しているもの、グループ活動によって新しい村づくりを実践している構造改善の旗手、村のホープたちの素顔を紹介しよう。

### 経営改善への強い意欲と自立性

★鮑託郡那麻村戸島 添島俊弘君（二十七才）

「やる気を出すことが第一だと思えます。」昭和四十一年度農林業経営コンクール新人部門で優賞を受賞した添島君は、放牧場の中の乳牛を見つめながらキツパリと語ってくれた。添島君は、農高卒業後をさい中心の経営をやろうと考えていたが、一年間親ゆずりの経営組織と農法で実際にやってみて、此処での畑作をさい経営が如何に不安定であり、改善発展が困難であるかを痛感した。

特に、夏期畑地が草で荒れるのをみて、逆に草利用の農業、畑地酪農をやろうと決心し、三十七年十月北海道より二頭を導入して経営改善に着手した。

丁度この年は戸島地区が構造改善事業の酪農パイロット地区として動き出した年でもあり、彼の計画をこの事業に合致させ、自からその推進力となったのである。

「私は卒業の翌年から経営をまかせてもらったので、自力で勉強し、計画実行してきました」

「とにかく、自力で改善する以外にはありません。私は自分の責任で近代化資金を利用し、自家育成を中心に拡大してきました」

「私は月に一〜二回本屋に行きます。本を読むのが好きなので、絶えず自分で勉強しなければと考えるからです」

在学中マラソンをやったという彼の話には、自分一人の力で走り抜くマラソンの体験からか、よく「自力」という言葉がでてくる。そして、この自力は決して場当りのなものでなく科学性（合理的）計画性（緻密さ）継続性（ねばり）に富んだものである。

彼はこの自力でパイロット地区としての構造改善事業に自分の経営改善を効果的に合致させながら、生産性の低い雑穀主体の経営から酪農主体の経営にきりかえ、農業近代化資金の活用、トラクターの共同利用を併用しながら僅か五カ年で搾乳牛十頭、育成牛五頭にまで多頭化した。

### 農村文化啓発の動き

「ワルツがきこえる。芝生の夜の庭、浮んだ幾組かのカップル。中年、青年、子供もいる。

のぼりはじめた十三夜の月が青々と庭の木立を浮き出させている。親しい友達の家。同志の静かな楽しい一刻「動中有静」多忙な仕事の間、一日中を休むことのむづかしい農業、この生活の中で余暇を無限に楽しめる方法は都市生活者のそれとは違ったものでなければならぬ。経済性と心の豊かさとの調和、そこに私はこれを求める」

これは、松橋町の若い農業者たちが発行している小雑誌「耕土」の第七号に、この会の中心人物の一人である前崎正隆君（昭和四十年農林業コンクール新人王受賞）が書いている、彼らが目指す農業者とその生活についての理想像の一部である。

この「耕土の会」は、「土を耕す」ともに心を耕し、教養文化を高めよう」と心がける農村の若者たちが集って昭和三十四年に発足した。

もともと前崎君は4日クラブや酪農研究会などのグループ活動の中から「多くの問題が自分ひとりの問題でない」とことを知り、グループによる経営や文化活動の推進を心がけてきたのであるが、特に「農業においては経営と生活のバランスが必要である。近年、経済優先が強すぎ

### 鶏卵 ★協業経営の好例

（前頁よりつづく）

子岳山麓に草地造成二十五畝を実施し、牧道・隔障物設置・家畜用水施設・看視舎等の整備によって、集約的な輪換放牧をとり入れた。なお、耕種部門においても、戸狩肉牛生産組合を事業主体として、大型トラクターを導入し、耕種部門の省力化をはかりながら、冬里飼養に対応する飼料作物栽培の比重を高めていった。

この事業と、肉用牛の高騰とが、タイミングよく一致したことも幸いして、参加農家の多頭化意欲は高まり、融資による肉用牛導入も三十頭に達した。

石淵地区は平地農村で水田地帯であるが、一戸当りの耕作面積は零細（六十坪）で、個別の副業的養鶏に所得を依存してきた。そこで、三十七年度農業構造改善を契機として、強く協業経営を推進するため、農事組合法人鹿本養鶏組合（中島進組合長十四戸）を組織し、補助事業による鶏舎五十棟によって三万羽協業経営が発足した。更に広域事業の有利な流通をはかるため、畜産物処理所（事業主体鹿本町農協）を運営している。

（農業構造改善課）

て精神的な面がおろそかになっている。経営の確立とともに、もっと農村文化を培っていききたい」と強調している。彼の牛舎はグループ員の協力により自分で作りあげたマンサード型の立派なものであるが、この二階には「耕心廊」の標燈をつけた彼らのグループ活動の本拠になっている一室がある。この壁には、この会の基本的態度である（考える）（記帳する）（クラブ活動する）（見学する）（行動する）という「カキクケコ」の歌が張っており、彼らはこの耕心廊に集って経営の分析、検討、農業問題や社会問題などの話し合いや「耕土」の編集などを行なっている。

「冷たい牛乳にのどをうるおし、鶏卵を思う存分に食ひ、子供たちの成長を見守りながら、うたをうたい、詩を作るほどの余裕をもち、自と他との調和の中に愛する人達との営みを持つ、そんな世界を私は実現したい」

ここに、マスコミ文化、都市文化とは違って大自然と密着した健康な農村の生活文化啓発の新しい息吹きを感じるのがある。

今後、このような理想に向ってひたすらに生きる若者たちの創意と努力が充分生かされるような条件が一層整備されたとき、真の農業構造改善のエンジンの響きは更に高まり、拡がっていくであろう。

（熊本農業高等学校教諭）

ている。

そして、今後は農協に勤めていた弟との共同経営、プラザー酪農を計画しており、この「自力」で育った新しい芽が、やはり兄弟による大型水田酪農経営を確立して注目を浴びている八代郡竜北村の早川酪農（S四十一年度農林業コンクール自立経営部門秀賞）に続く大規模プラザー酪農として成長していくものと期待される。

### 合理的で、たくましい実行力

★鮑託郡河内芳野村白浜 西山勇毅氏（三十四才）

濃いみどり色の樹々の中に粒ぞろいの鮮やかなオレンジの玉がついている見事なミカン園の中央で、西山氏は「農業は、やり方次第で相当もうかる」と力強く話し出してくれる。彼は、自宅から乗りつけた黒塗りの高級乗用車がびたりする企業の農業マンであり、果農祭の果実品評会一等入賞、果樹園経営共進会で優等入賞などに輝くみかん作りの実力者である。

「農業では根性・実行力・ネバリが大切」

「仕事に追われないこと、追われたらメクラになる」

「種や根がないと草は生えない。自分の圃には雑草はない」